

サ
ス
ペ
ン
ス

片割れのリング

P.N モリヤ
(森田沙彩)

人物

柳沢すみれ (31) (33) 看護師

馬場司 (31) (33) 救命救急士

谷山寛貴 (30) (32) 救命救急士

穂田慎 (31) (33) 救命救急士

要太陽 (31) 救命救急士

要の母

刑事

鑑識

○道路

吹雪の中、救急車が緊急走行している。
カーブで大きく車体が揺らぎ、横転、
電柱に衝突。

× × ×

1

雪の中、心肺蘇生をしている救命隊の
服を着た、馬場司（31）、谷山寛貴（3
0）。電話をしている稗田慎（31）。
そばで頭から血を流し倒れている要太
陽（31）、3人を見ながら、

要「殺してやるからな！」

○病院・ナースステーション

受話器を耳にあてている、ナース服の
柳沢すみれ（31）。
すみれ、目を見開き、受話器を落とす。

2

○寺・外観

T「2年後」

雪が降っている。

○同・和室

お経を唱えるお坊さん。祭壇には要の
写真。お坊さんの後ろには要の家族と
親戚、喪服を着た馬場（33）、すみれ
（33）。二人とも左手の薬指に指輪。
隣には喪服の谷山（32）、稗田（33）。

3

○会席

昼食を食べている、4人。
近づく要の母。

要の母「今日は足場が悪い中、三回忌にご参
加いただきありがとうございます」

馬場「いえ。三回忌に呼んでいただけるとは」
要の母「最期まで太陽の命を救おうと必死に
なつてくださった同僚ですもの。それに」
と、馬場とすみれを見て、微笑む。

4

要の母「ご結婚されるんでしょう？この場で申
し訳ないけど、おめでとうございます」

馬場、すみれ、慌てて頭を下げる。
要の母、呼ばれ会釈し慌てて立ち去る。

谷山、こつそりと、

谷山「嫌味にしか聞こえなかったな」

稗田「呼ばないわけにはいかないんだろ。あの救急車に同乗していたからな」

すみれ、浮かぬ顔で左手の婚約指輪を撫でる。

谷山「ていうか実家長野って、初耳」

馬場「自分のこと、話さないよな。あいつ」

稗田「馬場さんの場合は怖がられていたから」

馬場、バツが悪い顔。

谷山「厳しかったもんなー。もービクビク」
すみれ「そんなにキツかったの？」

谷山「そりやもう。あの日だって要、運転するって自ら志願したし。恐怖からだ、絶対」

稗田「違うだろ。谷山が弱音吐いたからだ」

谷山「そ？稗田だって反論しなかったくせに」

谷山、にやりと笑い、

谷山「俺たちの事、恨んでいたりして」

凍り付く、馬場、稗田。

すみれ、机の下で服の袖を握る。

馬場 「ば、何言ってるんだよ」

谷山 「だって、あいつを見殺しにしたんだぞ
俺たち。あ、すみれちゃんは除いて」

すみれ、苦笑い。

稗田 「医療従事者として患者優先だ。要だつて、それを望んで」

馬場 「おい」

すみれ、俯いている。

稗田 「あ：ごめん」

すみれ 「太陽は、私は笑顔が似合うって言った。だから、今回で最後」

微笑み合う、馬場とすみれ。

稗田 「麺が伸びる」

谷山 「馬場の鼻の下もな。食べるか」

○旅館・2階・谷山と稗田の部屋

和室。谷山と稗田、くつろぎながら、
谷山 「あの2人が結婚か。要も大喜びだな」

稗田、首を傾げ、

稗田 「要母の嫌味、それも含まれてるだろ」

谷山「え？なんで？」

稗田「ああ、知らないのか。お前だけ」

谷山「なにを」

稗田「要とすみれちゃん、付き合ってたんだよ。職場に内緒で」

谷山、目を見開き、

谷山「は！？え、じゃあ馬場は」

稗田「ま、今回で最後つてのも、要を吹っ切れるためだろ」

谷山「なあ、要のやつ恨んでないよな？な？」

稗田、降りやまない雪を窓から見る。

○同・すみれと馬場の部屋

タオルと浴衣を持った馬場、整頓する
すみれの荷物を見て、

馬場「また持ってきたのか。職業病だな」

すみれ「いつコール来るかってスマホ手放せない、司に言われたくないな」

と、ポーチ型の医療セットを持ち笑う。

○同（夜）

酔っぱらっている、馬場、谷山、稗田。

机には要と一緒に写った4人の写真。

すみれ、水のペットボトルを稗田に。

すみれ「稗田くんは潰れないでね。酒よわ2

人の頼みの綱。お酒強いでしょ？」

稗田「酔っぱらい回収係かよ」

谷山「注射名人すみれちゃん、看護よろしく！」

馬場「やめろ。強引に酒飲ませる奴は放置。

要にしてたろ」

谷山「頭固いな！お前は要に強く当たってた」

馬場「うっさいな。稗田は大学からの付き合

いだろ。散々飲ませたんじゃないのか」

稗田「こっちに火の粉飛ばすな。酔っぱらい」

すみれ「あの時、真っ先に稗田くんから連絡

が来たんだよね。緊急要請」

稗田「患者と要、どっちも救いたかったから」

谷山「患者は救えた。要は逝った。結果、バ

ッドエンド！」

要との集合写真が倒れる。

一同、顔を見合わせる。

稗田「仏の前で言うもんじゃないぞ」

馬場「谷山、酔い過ぎだ」

と、谷山を部屋まで送る、馬場と稗田。
その姿を見届ける、無表情のすみれ。

○同・谷山と稗田の部屋（深夜）

布団で寝ている稗田。

窓から誰かに押されて落ちる谷山の姿。
月夜に照らされた注射器を持つ手。

○同（早朝）

起きる稗田、谷山がいないと気づく。

○同・1階・庭

積もった雪の上で頭から血を流し死んでいる、怯えた顔をした谷山。

横並びで見ている馬場、すみれ、稗田。
馬場、おびえながら、

馬場「要の祟りだよ」

稗田「なに馬鹿なこと言ってるんだ」

馬場「じゃあ何で、こんな、怯えた顔して」

稗田「それは……」

すみれ「ここに居たら容疑者だよ。私たちが」

固まる3人。

稗田「で、でもさ、とりあえず警察に」

馬場「帰る。もうすぐ新婚だつてのに」

と、すみれと一緒に立ち去る。

頭をかき、ため息をつく、稗田。

○雪道・車内

運転している、馬場。助手席にすみれ。

すみれ「あの日も雪だった。太陽の顔、雪よ

り真っ白だったね」

馬場「やめろ。三回忌翌日に、こんな」

すみれ「悲しい顔より、笑顔が似合う」

馬場、ため息をつき、

馬場「付き合うとき、俺は要のことを忘れられなくてもいいって言ったけど、そろそろさ。……俺たち、結婚するんだぞ」

赤信号で止まる車。見つめ合う2人。

○旅館・庭

鑑識が刑事に駆け寄り耳打ちしている。
スマホを弄っている稗田。画面に『早く戻って来い。警察呼んだ』。

刑事「ジアミトール？なんだそれ」

鑑識「医療用消毒液。体内から出たんですよ」

刑事「それじゃ事件になっちゃうじゃないか」

それを聞いた稗田、ハッとする。

稗田「あの、ジアミトールって、どこから」

鑑識「え、ああ。おそらく腕だよ。真新しい

注射痕があつたからね。かなり小さいから、

打った人、相当手慣れてるよ」

稗田、慌てて引き返す。

○雪道・馬場の車・車内

青信号。発進する。

すみれ「殺してやるからな」

馬場「え」

すみれ「あの日、稗田くんから要請あった時
うしろから太陽の声が、殺してやるって」
と、悲し気に薬指の指輪を曇った空に
かざす。

○すみれの回想・太陽の部屋

太陽の両親と遺品整理をしている、すみれ。すみれ、押し入れの奥から白い紙袋を見つめる。
中から手のひらサイズの小箱。
すみれ、ハツとする。震える手で箱を開けると、2つ並んだ婚約指輪。
すみれ、大事に抱え、大泣きする。
異変に気付き、太陽の両親が駆け寄る。
すみれの声「あのと、太陽の部屋から小さな箱を見つけた。指輪が2つ並んで」

○戻って

目を見開く、馬場。

馬場「え」

すみれ「ねえ、あの日、見殺しにしたんでしょ。太陽と私が付き合っていたから」

と、歪んだ笑みを浮かべる。

○雪道・稗田の車・車内

運転している、焦ってた表情の稗田。

稗田「すみれちゃん、誤解してる」

○雪道・馬場の車内

馬場「な、なに言ってる……。その指輪」

すみれ「やっと気づいた。同じもの贈るなんて皮肉だよ。これは太陽がくれるはずだった、婚約指輪の片割れ」

と、注射器を取り出す。

馬場、驚き、運転が狂う。大きく横転。

○同

雪道の中、仰向けで倒れている、馬場。すみれ、頭から血を流しながらも、馬場の腕を出し、注射しようとする。

稗田の車が近づき、急停車。

慌てて稗田が出て来る。

稗田「すみれちゃん！」

すみれ、稗田に構わず打とうとする。

稗田、すみれを阻止。

すみれ「離して」

稗田「嫌だ」

すみれ「太陽を見殺しにしたくせに」

稗田「それは」

すみれ「3人とも、いいコマ扱いして。太陽の遺言を私は実行する。あとは、稗田くんを殺せば」

稗田「：患者を死なせたら、お前たちを殺してやる」

目を見開き、固まるすみれ。

すみれ「：え？」

稗田「あの日、要は俺より患者を優先しろ。

患者を死なせたら、お前たちを殺すからな。そう言ったんだ。誰よりも患者第一だった」

すみれ、理解出来ず首を横に振る。

すみれ「嘘だ」

稗田「要、誰よりも優しくて正義感が強い。

俺たちもあいつのやさしさに甘えていた」

すみれ「嘘だ！」

稗田「病院に到着したとき、要の顔、綺麗だ

ったろ。満足な顔していなかったか」

すみれ「あ……」

稗田「1人で満足して勝手に旅立った。言わ

なかったのは、すみれの笑顔を要が奪って

欲しくない。俺たちのせめてもの、償いだ」

すみれ、指輪を撫でて、泣く。

